

「ロ
ン
リ
ー
・
サ
マ
ー
・
フ
レ
ン
ズ

作

サ
サ
キ
タ
ツ
オ

《登場人物》

純太（17） 高校2年生

（じゅんた）

明人（17） 高校2年生、純太の親友

（あきと）

瑠海（17） 高校2年生、純太の幼馴染み

（るみ）

* 3人とも同じ高校に通う。

■ 第1場

高校の教室。

純太がいる。

純太「流れる。漂う。さまよう」

空を見上げて。

純太「青い空に白い雲が流れている。白い雲はまるで空気を切り裂いている。かのように移動していると僕は思った。移動しながら雲は空気を傷つける。そして、また安定する。雲は僕たちに似ている。この世界の中で、傷つけあいながら漂いさまよっている僕たちに似ている。空気を壊さないように、安定を壊さないようにしながら、それでも、動かすには無理、変わらない、変わらぬには無理、僕たちに似ている……」

いつの間にか、明人がやってきて、隣に並ぶ。

明人「詩人だな」

純太「うるさい」

明人「じゃあ、練習再開な」

純太「もうやめよう」

明人「好きだ」

純太「……だから、ない」

明人「ダメか？」

純太「ダメだな」

明人「そんなに？」

純太「うん」

明人「もう一度」

純太、明人の言葉を待つ。
だが明人はモジモジして言い出せない。

純太「おい」

明人「わかってる」

純太「言うなら、はやくしろ」

明人「お前にわかるか？ この緊張。この気持ち」

純太「わかるかよ」

純太、明人を見る。
明人、純太を見る。

見つめ合う二人。

明人「好きだ」

純太「だからストレート。普通すぎ。感情が伝わってこない」

明人「好きです」

純太「丁寧すぎ」

明人「好きじゃん？」

純太「軽薄」

明人「好き好き好き」

純太「ふざけてんのか？」

明人「じゃあ、なんて言えばいいんだよ」

純太「何も言うな。諦めろ」

明人「それは無理。好きな気持ちは伝えたい」

純太「えー」

明人「どうすりゃいいんだ」

純太「直接言わない、とか？」

明人「ん？　というと？」

純太「もつと。こう。間接的な感じ？　　っっていうか」

明人「間接的ね、例えば？」

純太「例えば……」

純太、考え、言葉に詰まる。

明人「ほら。無理じゃん」

純太、窓の外の空を見上げて。

純太「空が青いなあ、とか」

明人「え？」

窓の外の空を見る明人。

明人「曇りだけど」

純太「なら、雲が綺麗ですね、とか」

明人「は？」

純太「いや、だから。好きとは言わない、間接的な感じ」

明人「は……？」

純太「雲がきれいですね、意外とよくない？」

明人「意味不明だろ。それで俺の好きが伝わるのか？」

純太「わかる人は、汲み取ってくれる、と信じる」

明人「いや、さすがにわからんと思うけどな」

純太「雲が綺麗ですね」

明人「空が青いですね」

純太「そうか」

明人「そうだよ」

二人、沈黙。

明人「うん。無理」

純太「じゃあ、好きにしろ」

明人「間接的になって、お前が言ったんだろ」

純太「まあ」

明人「やっぱ、直接だな」

純太「うーん……」

明人「そんなダメか？ 俺の告白」

純太「……リスク大きくない？」

明人「え」

純太「好きってさ、直接言ったら、もう二択しかないじゃん」

明人「二択？」

純太「答えはイエスカノー」

明人「そりやそうだ」

純太「好きです、嫌いです。好きだ、嫌いだ。好きじゃん、嫌いじゃん」

明人「ん？ つまり？」

純太「ハッキリさせるの、怖くないのか？」

明人「ハッキリさせるために告白するんだろ」

純太「でもさ、断られたら……気まずくなるわけじゃん」

明人「え。俺、断られるの？」

純太「いや。あ、そつか。そうだよな。好きです、好きです。好きだ、好き

だ。好きじゃん、好きじゃんのパターンもあるのか、一応」

明人「一応って、そうだろ。それなら問題なしだろ」

純太「まあ……いや、でも……」

明人「何？」
純太「彼女がなんて言うか……」
明人「……何か知ってるのか？」
純太「いや別に。何も」
明人「ふーん？」
純太「いやマジで何も」
明人「じゃあ、いいだろ。直接」
純太「……うん」
明人「不満げだな」
純太「そんなことないよ」
明人「だったら、俺の代わり。やってくれ」
純太「は？」
明人「間接的になる」
純太「いやいや」
明人「ナイスアイデアだ」
純太「責任逃れだろ」
明人「俺の恋愛は、純太。お前にかかっている！」
純太「お、重い……」
明人「よし、そうと決まれば、練習だな」

純太「は？　なんの練習？」

明人「お前の言葉がちゃんと伝わるか」

純太「えー」

明人「さあ！」

明人が姿勢を正して純太を見る。
純太が姿勢を正して明人を見る。

明人「カモン！」

純太「……」

明人「ほらほら」

純太「……好き、らしい、よ」

明人「は？　誰が誰を？」

純太「好きです、って伝言で」

明人「はあ？　だから誰が誰を？」

純太「好きなんです、と言っている友達がい……」

明人「ストップ！」

明人、頭を搔いて。

明人「なんか、まるでお前が好きだって告白しているみたいになるな」

純太「え……」

明人「なんか間接的に言おうとしているのか、みたいな。空気感じる」

純太「そうか？」

明人「そうだよ。そこ誤解されると困るわけで。それは回避しないと」

純太「それはそうだな」

明人「白い雲が流れる、青い空気を引き裂くようにして、流れていく……俺

たちは、ただ流されてこの世界を漂っている……」

純太「は？」

明人「やっぱ、言うのやめるか」

純太「どういう流れ？」

明人「俺も言えない、お前も伝えられない。つまり、どうしようもないって

ことだろ」

純太「んー。まあ、な」

明人「どうするか」

純太「言うなら、自分で言ってくれ」

明人「ああ、くそー。悩むー」

純太「はいはい」

二人、たたずむ。

■ 第2場

帰り道の河川敷。

赤い夕暮れ。

瑠海が待っている。

瑠海「待ってる。待ってない。待ってる」

空を仰ぐ瑠海。

瑠海「雲が流れている」

空に手をかざす瑠海。

瑠海「流れている、曇り、のち晴れ」

ため息をついて、うつむく瑠海。

瑠海「待ってる。待ってない。待ってる。待ってない。やっぱり待っている。待っているんだ。遅い！」

地団駄を踏む瑠海。

瑠海「夕暮れの河川敷。帰り道の彼を、私は待っていた」

そこへ、やってくる純太。

瑠海「よ」

素通りしようとする純太。

瑠海「よよよ」

純太の前に立ちはだかる瑠海。

純太「なんだよ」

瑠海「何してた？」

純太「え？ 何って何も」

瑠海「ふーん」

純太「んだよ」

瑠海「男子二人、教室で密会！」

純太「あれは……」

瑠海「ボーイズ・ラブ的展開！？」

純太「まさか」

瑠海「じゃあ、何？」

純太「だべってただけ」

瑠海「何を？」

純太「知るか」

瑠海「知らないこと、知ったふりして、喋ってたの？」

純太「は？」

瑠海「だから、知らないことをあたかも知っているかのようにしやべってたの
かなって」

純太「意味わからん……。ってか、教えない」

瑠海「教えて」

純太「そんな義理ない」

瑠海 「だって、聞いちゃったんだ」

純太 「え……？」

瑠海 「聞いちゃったの」

純太 「な、何を？」

瑠海 「好きだって」

純太 「え。いや。それは……」

瑠海 「私、ビックリして。あーそういうご関係だったんですかーって」

純太 「……」

瑠海 「やっぱりそうなんだ」

純太 「そうじゃない」

瑠海 「違うの？」

純太 「違うよ」

瑠海 「じゃあ、何？」

純太 「……トレーニング」

瑠海 「トレーニング？」

純太 「筋トレみたいなもんだ。男子の」

瑠海 「ふーん。男子の筋トレ、ね。明人君、告白の予定あるんだね」

純太 「ないような、あるような」

瑠海 「ないよりのありってことね」

純太「んー。まあ……。誰にも言うなよ」

瑠海「ビックリして損した」

純太「もういいだろ」

瑠海「で。誰なの？」

純太「え……。？」

瑠海「誰なの？ 相手は、秘密？」

純太「なんでお前に言わなきゃいけないんだ」

瑠海「誰にも言わないよ」

純太「そういう問題じゃない」

瑠海「男の友情？」

純太「そんなとこ」

瑠海「でも。それを言うなら、私との友情は？」

純太「は？」

瑠海「幼馴染みの友情関係」

純太「ないとは言わないけど」

瑠海「じゃあ、教えてくれてもいいよね。減るもんじゃないし。私のこと信

頼してるでしょ？」

純太「それは……。いや、無理」

瑠海「なんで？」

純太 「女子には言わない。そういうもんだろ」

瑠海 「私は男子みたいなものでしょ？　ねえ。ねえーねえー」

純太 「しっこいな」

瑠海 「しっこくするよ。永久にしっこくされてもいいの？」

純太 「……無理。俺そんな口軽くない」

瑠海 「えー。教えてよ」

純太 「じゃあ、察してくれ」

瑠海 「え？」

純太 「察してくれ」

瑠海 「なにそれ」

純太 「……」

瑠海 「まさか……私とか？」

瑠海、自分を指さす。

純太 「……」

瑠海 「えー。なになに。それは困るなあ」

純太 「……」

瑠海 「困るよー。困る困る困る」

純太「そんな？ 困る？」

瑠海「え？ マジで私？」

純太「あ、いや……」

瑠海「マジか」

純太「だとしたら？」

瑠海「私……だって、私！」

純太を指さす瑠海。

純太「何？」

瑠海「（不敵にほほ笑んで）絶対、言わないけどね！」

瑠海、駆け去る。

純太、呆然と立ち尽くして……。

■ 第3場

河川敷。

藍色の夕暮れ。

明人が、その情景をじっと眺めている。

明人「雲が流れていく」

明人、遠くを見る。

明人「雲がそびえたつ。雲が立ちほだかる。壁。それは壁だ。俺が越えないといけない、壁だ」

純太がやってくる。

純太「よ」

明人「おう」

純太「遅くなった」

日没を眺める二人。

明人「日が沈むな」

純太「ごめん」

明人「いや、いいけど。ん？ 何に謝った？」

純太「遅くなったこと」

明人「あ、そっか」

純太「うん」

明人「で、どう？」

純太「え？」

明人「元気ないぞ」

純太「そうか？」

明人「告白した？」

純太「は？」

明人「された？」

純太「は？ いやいや」

明人「いつも近くにいてるってどんな感じ？」

純太「……」

明人「……俺にもチャンスあるかな？」

純太「あるだろ。フツ―誰にでも」

明人「一般論は聞いてない」

純太「告白……するの？」

明人「まあ」

純太「いつ？」

明人「明日」
純太「明日？」
明人「明後日」
純太「は？」
明人「いつか」
純太「いつだよ」
明人「いつだろうな」
純太「チャンスがあるっていうなら、グダグダ言っていないで行けよ」
明人「せかすなよ」
純太「ごめん」
明人「何に？」
純太「だから、せかすようなこと言ってる」
明人「やっぱりせかしたのか」
純太「いや……それは」
明人「それで、ふられると？」
純太「どうしてそうなる？」
明人「俺の予感。勝利のパターンが見えない」
純太「ビビってるんじゃないの？」
明人「……距離感。親密度。総合的観点からして、俺、敗北」

純太「ぐだぐだ」

明人「聞けよ」

純太「行けよ」

明人「行ってくて」

純太「なら。俺が言うことはない」

明人「行く。行くよ。行かない後悔より行って後悔したい。けど、傷つきたくない」

純太「……」

明人「すべてを正直に、なんでも明らかにすればいいって、違うと思うんだ」

純太「……」

明人「もつと俺たちって、曖昧で、不確かかっていうか……。あいまいだから、いいものもあるんじゃないのかって……」

純太「……わかる、気がする」

明人、雲の流れに目を移す。

純太も雲の流れに目を移す。

明人「流れていくな」

純太「ああ」

明人「白くて」

純太「ああ」

明人「ただ、流れてく」

純太「うん」

明人「明日も。明後日も。同様にして」

純太「でも、変わらないではいけない。否応なく、世界は変わっていくから……」

明人、純太を見る。

明人「そうだな」

純太「そうだよ」

明人「……」

純太「……」

明人「俺、言うよ」

純太、明人を見る。

純太「わかった」

明人、ゆっくり手を振って、去る。

純太「藍色の空に白い雲が流れていた。行け。行つてこい！ 僕は友達の間を押した。押すことしかできなかった。友達は撃沈するだろう。いや、間違いなく撃沈する。そうなることを願っている自分がいた。そんな自分が嫌だ。でも、行け。行つてこい！ 僕は友達の背中を押した。押してしまつた。元気よく。何も知らない顔をして。ああ、なんて残酷なんだ。残酷なことをしたのだ。僕はどこかで友達が告白に失敗すればいい、失恋すればいいと思っている。その思いがないと言えば、ウソだ。真つ白な中にあるどす黒い点のような、嫌な感情。失恋してほしい。そうなければいいと思っている、そんな自分が怖い……。僕はなんて汚い人間なんだ。嫌になる。くそう。くそう。くそう。あの雲みたいに白くはなれない……。くそう。曇りのない心ではもういられない」

純太、空を見つめる。

純太「流れていく」

純太、遠くを見る。

純太「白い雲が空気を壊していく。いや、夏の青い空気が雲を切り裂いていくのか。雲は、ちぎれ、乱れ、壊れ、流されていく」

■ 第4場

帰り道。河川敷。

赤い夕暮れ。

瑠海が純太を待っている。

瑠海「言われた。言われた。言われた」

瑠海「どうしたって、私はその気持ちを受け取ることはできなかった」

瑠海「青空がきれいですね。と彼」

瑠海「そうですね。と私」

瑠海「好きです。と彼」

瑠海「無理です。と私」

瑠海「わかりました。と彼」

瑠海「うつむく。私」

瑠海「立ち去る。彼」

瑠海、空を仰ぐ。

瑠海「雲が流れていました、足早に。上空では強い風が吹いているのでしょ
うか。白い、足早の雲。強い風に流されて。この青空を、この世界を、漂
っているのです」

瑠海、うつむいて地団駄を踏む。

そこへ純太がやってくる。

瑠海「よ」

素通りしようとする純太。

瑠海「言われた！」

立ち止まる純太、ゆっくり瑠海を見る。

瑠海、純太と距離をとって。

瑠海「言われた。好きだって」

純太「……知ってる」

瑠海「そっか。そうだよね」

純太「うん」

気まずい沈黙が流れる。

純太「それで？」

瑠海「それで？」

純太「何？」

瑠海「何って何？」

純太「何って何、って何？」

瑠海、笑う。

純太は呆れる。

純太「笑うところかよ」

瑠海「だって」

純太「……」

純太、去ろうとする。

瑠海「待って」

純太「何？」

瑠海「この前の、気にしてる？」

純太「は？」

瑠海「指さしたの」

純太「……別に」

瑠海 「あれ。ジョークだから」

純太 「は？」

瑠海 「本気にした？ 私があんたを好きだって」

純太 「してない」

瑠海 「でも、意識した。でしょ？」

純太 「……アイツ、いいヤツなのに」

瑠海 「好きじゃないから」

純太 「でも、嫌いじゃないんだろ」

瑠海 「嫌いじゃない。けど、好きじゃない」

純太 「残酷だな」

瑠海 「恋は、残酷だよ」

純太 「……」

瑠海 「私の気持ち、ジョークにしてほしい？」

純太 「は？」

瑠海 「本当だと思う？ それとも嘘だと思う？ どう思う？」

純太 「お前じゃないから。わからないよ」

瑠海 「じゃあ、私が、本気だったら？」

純太 「え……」

瑠海 「どうする？」

純太 「それは……」

瑠海 「考えてくれる？」

純太 「なんのことだか」

瑠海 「わかるでしょ」

純太 「わからないよ」

瑠海 「わかってよ」

純太 「仮の話はできない」

瑠海 「私の気持ち、想像して」

純太 「無理」

瑠海 「想像して」

純太 「無理だって」

瑠海 「想像！」

純太 「無理だよ！」

語気が強くなる、純太。

瑠海、少し驚くが、純太の周りを歩く。

瑠海 「じゃあ、言うよ？ 言葉にして言っちゃうよ？ ハッキリと、この口から言葉にしちゃうよ？ それでも、いいの？ 本当にいいの？」

純太「……俺は、そういう、脅しみたいなの、好きじゃない」

瑠海「え……？」

純太「それに、俺は、恋人とかそういうのはいい。必要ない」

瑠海「……ふーん」

純太「そういうことだから」

瑠海「は？ 何？ 私だって、別に恋人とかいらないよ？」

純太「え？」

瑠海「全部冗談に決まってるじゃん」

純太「は？」

瑠海「そういうことになりました」

瑠海、立ち止まり、純太を見る。

瑠海「……アホ！」

瑠海、純太の膝を蹴って、去る。

純太、瑠海の去った方を見て……。

■ 第5場

高校。教室。

明人が窓辺で空を眺めている。

純太がペットボトルを2本持ってやってくる。

純太は、ペットボトルを1本、明人に渡そうとするが、
明人は受け取ろうとはしない。

純太「おい」

明人「んー」

純太「おーい」

明人が受け取らないので、
純太は諦める。

明人「俺にはわかる」

純太「何が？」

明人「お前より、わかる。彼女のこと」

純太「あんな」

明人「お前が付き合えばいい」

純太「俺は違うし」

明人「俺が違ったんだ。俺は彼女の問題の正解じゃなかった」

純太「意味わからん」

明人「お前なんだ、正解」

純太「は？」

明人「だから付き合え。俺のために」

純太「俺の気持ちには？」

明人「そんなの、わかってる。好き、なんだろう？」

純太「……好きじゃないよ」

明人「いまさら」

純太「いや、ホント」

明人「ウソだね」

純太「ウソじゃない」

明人「ウソツキは、嫌いだ」

純太「ウソじゃないって」

明人「じゃあ、絶交しようぜ」

純太「は？」

明人「そしたら、俺に遠慮しなくて済む」

純太「ホント、意味わからん」

純太は明人にペットボトルを、再度、差し出す。

受け取らない、明人、立ち上がる。

明人「殴れ」

純太「は？」

明人「俺はお前を殴りたい」

純太「ん？」

明人「だから、まず、俺を殴れ。そうすれば、俺はお前に遠慮しないで済む」

純太「いや……」

明人「殴れ！」

純太「……殴れるかよ」

純太は両手がふさがっていた。

明人「わかった」

明人、純太からペットボトルを受け取る。

明人「これでいいだろ」

純太「殴っても、解決しないだろ」

明人「解決するかもしれない」

純太「解決しないよ」

明人「どうかな」

純太、明人の顔を非常に軽く殴る。

明人「……本気出せよ」

純太「これで十分だろ」

明人、純太を殴ろうと勢いをつけるが、途中で迷い、結局、軽く殴る。

純太「……お前こそ」

明人「お前のせいだからな」

純太「人のせいにするな」

明人「……そうだな」

明人、去る。

純太はペットボトルのふたを開けて飲む。

純太「僕は殴られて当然だった。僕も本当は彼女のことを好きだったから。でもそれは心の中に押し殺してきた感情であつた。それが表に出ることは決してないはずだった。それなのに見透かされていた。隠さなくては！僕は、僕の平和を、僕の日常を大事にしたい。大事な友達との友情を、これからも、守っていききたい、続けていききたい。恋なんてどうだっていい。それよりも友情を裏切ることの方が、罪深い」

純太、去る。

明人がやってくる。

明人「本当にみじめだ。哀れな俺を笑ってくれ。友達を疑った。友達のせい

にしようとした。自分の失恋を、人のせいにして、楽になろうとした。俺はズルい人間だ」

明人が去る。

純太が戻ってくる。

純太「僕は嘘を重ねた。嘘を重ね過ぎて、何が本当なのか、もうよくわからない。友達のことを大事に思っている、とか。彼女の事が好き、とか。本当の気持ちはどこにあるんだ？」

純太、空を見上げる。

純太「空に雲が流れている。青い空気を白い雲が切り裂いていく。僕らは、そんな世界の中で、ただ、傷つきながら、流されて、漂っていく……」

■ 第6場

帰り道。河川敷。

青い夕暮れ。

瑠海が純太を待っている。

瑠海「青い空に白い雲が流れている」

遠くを見る瑠海。

瑠海「入道雲がそびえたつ、夏の壁。それが崩れていく。夏が終わろうとしている」

耳を澄ます瑠海。

瑠海「セミの鳴き声も微かだ」

瑠海、待つ。

純太がやってくる。

純太が今回も素通りしようとする。

瑠海「よ」

瑠海が純太の前に立ちはだかる。

純太は瑠海を避けて行こうとする。

瑠海は必死に純太を妨害する。

戦いになる。

結果、純太が負ける。

純太、仕方なく、瑠海との会話に応じる。

純太「何？」

瑠海「待ってたよ」

純太「なんで？」

瑠海「さて。なんででしょうか？」

純太「さあ」

瑠海「なぞなぞ」

純太「なぞなぞはいいよ」

沈黙。

瑠海 「遊び、行こうよ」

純太 「え。急だな」

瑠海 「いいじゃん」

純太 「いやでもな」

瑠海 「映画は？」

純太 「いや」

瑠海 「遊園地は？」

純太 「いや」

瑠海 「散歩は？」

純太 「いや」

瑠海 「じゃあ、何がいい？」

純太 「うーん」

瑠海 「考えてはくれるんだね」

沈黙。

純太 「帰るよ……」

瑠海「……待つて」

純太「何？」

純太の前に立つ瑠海。

瑠海「好き、なの」

瑠海からの告白だ。

純太「え……」

瑠海「だから、純太のことが、好き」

だが、純太は受け止めきれない。

純太「僕には……無理だよ」

瑠海「でも、好き」

純太「無理」

瑠海「なんで？」

純太「なんでも」

瑠海 「明人君が告白したから？」

純太 「それもある」

瑠海 「も？　ほかにある？」

純太 「あるよ」

瑠海 「何？」

沈黙。

純太 「……友達だから」

瑠海 「え」

純太 「お前も、僕にとっては、友達だから」

瑠海 「友達……」

純太 「ごめん」

瑠海 「友達から始まる恋だってあるよ」

純太 「僕の中では、ないから」

瑠海 「時間、かかってもいいよ？」

純太、行こうとする。

せき止める瑠海。

純太「ごめん」

純太は、去る。

瑠海「今すぐじゃなくてもいいから」

瑠海は純太の去って行った方に叫ぶ。

瑠海「私、諦めないから」

■ 第7場

暗い部屋。心の中の幻想。

純太が現れる。

純太「親友のため？ 彼女のため？ 全部、言い訳だ。自分のためにやっているんだ。僕は誰にでもいい格好したい偽善者だ。いい人でいようと振る舞いたいだけだ。そして、僕は臆病者だ。自分が傷つくのが、ただただ怖いんだ。彼女と付き合えば、親友を失う。親友との友情をとれば彼女との恋

を失う。両方とも失わない方法は？　それがわからない。僕が彼女を好きでなくなればいいのか。それが正解だろうか？　何が正解なんだ？　正解なんてあるのか？　わからない……わからない……」

純太が退場する。

明人が現れる。

明人「好きだけど、嫌われたくはない。これ以上は近づけない。近づかない。俺は、節度はわきまえている。彼女には幸せになってほしい。俺の思いが届かなくても、それはいいんだ。俺よりアイツ。アイツが彼女と付き合ってくれば……。それが幸せなんだと思う。でも、そうなれば、俺は絶望する。ただどきつと諦められるに違いない。アイツが彼氏になるなら、負けを認められる気がする。強がりだろうか。でも、今はまだ、心の整理がつけられない」

明人が退場する。

瑠海が現れる。

瑠海「好きなものは好き。これは傲慢な考え方かもしれない。でも、私はあなたしか見えない。それ以外考えられない。どんなに他の男子に言い寄られても、断り続けてみせる。あなたしか見えない。でも、あなたは私の想いには応えてくれない。あなたの性格はわかってる。だから、私の恋愛は悲しい。でも。そんなきっぱり諦めきれるものじゃない……だから、私は、私の考え方で行く。好きなものは好き！」

瑠海が退場する。

純太が現れる。

純太「自分がいい人であろうとすればするほど、偽善者になっていく。その仮面の下には、ドロドロした、感情が眠っていて。それと向き合いたくない。僕は現実逃避し続けていたい……。怖い。触れるのが怖い。近づくのが怖い。近づかれるのが怖い。親しくなるのが怖い。本当に理解されるなんて、思えない。理解しあえるなんて幻想だ。世界はどう考えても、孤独に包まれている」

純太、空を仰ぐ。

純太「見えない。空。青い空。茜色の空。藍色の空。暗闇の空。……変わる空。やがて、めぐる、空。やがて終わる、夏」

純太、退場する。

■ 第8場

帰り道。河川敷。

青い夕暮れ。

明人が純太を待っている。

明人「雲。流れる雲。夕焼けに染まる」

瑠海がやってくる。

瑠海と明人、会釈する。

明人のとなりにやってきて並ぶ瑠海。

明人「いま、帰り？」

瑠海「うん」

明人「そっか」

瑠海「うん」

明人「俺も」

瑠海「そうなんだ」

明人「うん」

瑠海「待ってるの？」

明人「もうすぐ、来るよ」

瑠海「そっか」

明人「一緒に、待つ？」

瑠海「え？」

明人「なんとなく」

瑠海「じゃあ、そうしてみようかな」

明人と瑠海、距離を開けて並び直す。

明人、空を仰ぐ。
瑠海、空を仰ぐ。

明人「空が青いですね」

瑠海「そうですね」

明人「雲が速いですね」

瑠海「そうですね」

明人「蝉の声が微かになりましたね」

瑠海「そうですね」

明人「夏が終わりますね」

瑠海「そうですね」

気まずい間がありつつも。

明人と瑠海は純太を待った。

純太がやってくる。

純太 「あれ……？」

瑠海 「よ」

明人 「よ！」

純太 「珍しい」

瑠海 「そう？」

明人 「こっち、来いよ」

三人が、それぞれの距離で佇む。

純太 「何、してた？」

明人 「空と雲」

瑠海 「眺めてた」

純太 「ああ……」

瑠海 「夏が終わるね、って」

明人 「そうそう」

純太 「夏の終わりか……」

蝉の声、微かに聞こえる。

瑠海「それじゃあ。また」

瑠海、手を振って、去る。

明人と純太だけが残る。

純太と明人、並び直す。
親友の距離感。

明人「この前は……」

純太「もういいよ」

明人「そっか」

純太「うん」

明人「空が青いな」

純太「確かに」

明人「雲が速いな」

純太「確かに」

明人「どこまでも行ける気がするな」

純太「え。それはさすがに無理だろ」

明人「想像力だよ」

純太「想像力か……」

明人「ああ」

純太「日が、沈むな」

明人「沈んでいくな」

日が沈んだようだ。
あたりが薄い藍色に染まる。

明人「沈んだな」

純太「だな」

明人「行くか」

純太「おう。行くか」

明人、去る。

純太も行こうとするが、とどまり、
空を見上げる。

純太「空に雲が流れている。青い空気を白い雲が切り裂いていく。僕らはそんな雲みたいに流れて流されて、この世界を漂って生きていくんだろうか。青くて、脆くて、儚い、ちっぽけな、僕たちは、ただひたすらに、青い空間を孤独にさまよい続ける……」

純太、空をじっと見つめる。

（終）